

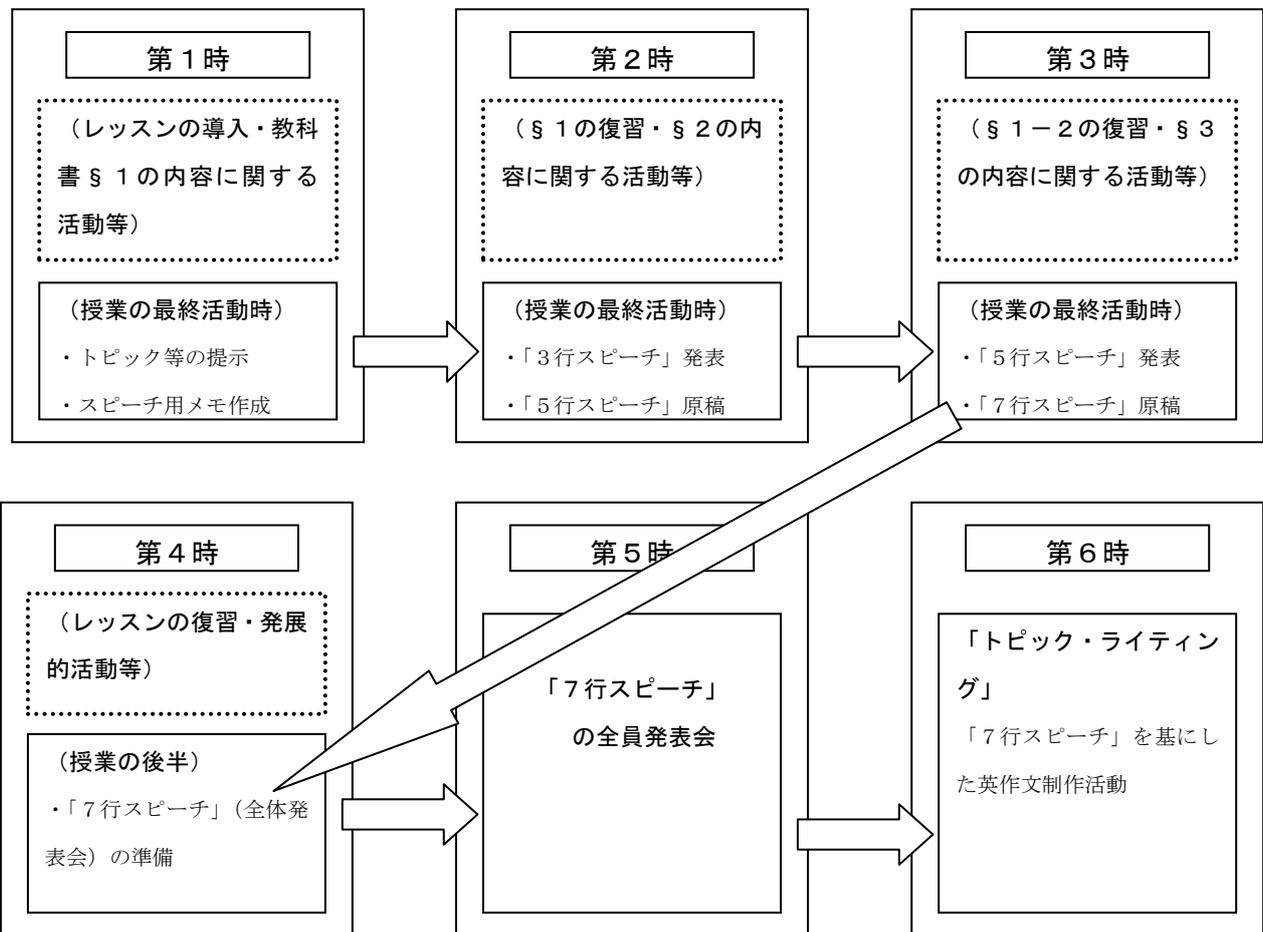
# 「話すこと」「書くこと」を組み合わせた指導の実践

【白岡町教育委員会】

- 1 学校・学年・教科 中学校・全学年・英語科
- 2 ねらい 主として「話すこと」と「書くこと」の各活動を、意図的・有機的に組み合わせた指導過程を設定し、目標表現等を繰り返し活用させる中でそれらの定着を図るとともに、表現力の向上を図る。

## 3 取組の内容

### (1) 指導過程のイメージ



### (2) 各段階の取組概要

ア ショート・スピーチの取組① [(1)の「第1時」から「第4時」] (主に「話すこと」の指導 ※スピーチ用原稿については、「書くこと」の指導に含まれる。)

1 単元 (レッスン: 6時間程度扱い) の4時間を通した「帯活動」として、単元の題材に関連したトピックや目標表現等を用いたスピーチを行う。

3行程度から始め、毎時間、1~2行程度増やし最終的には7~10行程度のスピーチを発表できるよう、段階的に指導する。本単元の第1時で、ショート・スピ

一斉のトピック等を生徒に提示し、次時以降の準備をするように指示する。第2時から第4時の授業の最後あるいは最初の部分に、ショート・スピーチの活動を設定する。ここでは、途中段階の発表（数名）をするよう計画し、話すことに関する指導を施す。併せて、そのスピーチに1～2文を付け加えるよう指示し、少しずつ話す内容を増やしていくよう指導する。スピーチのための原稿はメモ程度の扱いとするが、基本表現等に関しては、筆記するよう指導し、机間指導等により適宜フィードバックをする。

イ ショート・スピーチの取組②〔(1)の「第5時」〕

第1時から第4時のまとめとして、ショート・スピーチの発表会を実施する。ここでは、全員がショート・スピーチを発表し、話すことの評価の場とする。

ウ 制作（ライティング）の取組〔(1)の「第6時」〕

単元（レッスン）の総まとめとして、(2)ア、イで用いた原稿（スピーチ用メモ）を基にして、英作文に取り組みさせる。本時は、「書くこと」に主眼を置くため、適切な筆記と共に、正確な筆記についても留意させ、辞書の使用等も認めている。

読み手を意識した表現活動となるよう、イラストや写真等の貼付も促すと共に、生徒の関心・意欲の喚起にも努めている。

(3) 実施上の留意事項

ア 「話すこと」と「書くこと」のねらいを明確にして指導する。例えば、第1～4時におけるスピーチの取組においては、「話すこと」に関する指導に重点を置き、「書くこと」に関することは明示的に評価することは避けている。

イ 単元（レッスン）の総まとめでは、書いて表現する「制作」があること、またその前には「全員が全員の前でスピーチ」をすることを、生徒に明確に理解させておき、生徒にも中期的な展望をもたせる。

4 取組の成果

(1) 一つの単元を通して、同じ表現等を繰り返し、話したり書いたりして活用することにより、目標表現等の定着が図られている。

(2) 目標表現を核として、徐々に文量を増やしていくことにより、生徒の表現力や思考力が高まってきている。

(3) まとまりのある英文を扱うことに慣れてきている。(まとまりで話したり、書いたりすることを億劫がる生徒が減少している。)

(4) まとまりのある英文で話したり書いたりするためには既習事項を活用する必要がある、その想起・定着に効果がある。(スパイラルな指導が実現している。)

(5) 聞き手や読み手を意識した表現活動ができるようになりつつある。